

「ミスター・ピップ」

訳者あとがき

大友りお

ソビエト連邦が崩壊し、ベルリンの壁が取り除かれた1989年は、昭和天皇の崩御により日本の長い戦後が終った年でもありました。この同じ年に、フランシス・オナを中心とするブーゲンヴィル島の若者たちは、パプアニューギニアからの独立を主張して立ち上がりました。これがこの物語の背景となったブーゲンヴィル抗争と呼ばれる事件です。1970年の半ばから、英国資本でオーストラリアの管理になる世界一広大な開鉱山が島の中心部をけずりとり、自然を破壊し、ブーゲンヴィル人の生活を一変させていました。銅や金の生産に伴う巨額の税収はパプアニューギニア政府の唯一の収入の拠りどころであったため、政府は武力でブーゲンヴィル革命軍を抑えようと、本国から兵を送り込みました。革命軍はジャングルに隠れ、第二次世界大戦時に日本軍が残っていた、大量の銃砲を修復して、しぶとく戦い続け、1991年までの三年間に、両軍一般島民合わせて一万人以上の犠牲者を出しました。抗争は国連の介入による1997年の武装放棄まで続き、十年を経た現在も不安定な状態が続いています。

ロイド・ジョーンズ(1955年生、ニュージーランド出身、元ジャーナリスト)は、多彩な文体を駆使することのできる、数少ない作家のひとりで、近年その才能が広く認められてきています。この作品で彼は読者をブーゲンヴィル抗争の真っ只中に連れて行き、現地の少女マティルダの眼を通して、様々なメッセージを私たちに伝えてきます。

無心と自意識の間を揺れる年齢（13歳から15歳までの期間を中心に描かれている）が綴るモノローグは、読者をつなぐ紐を引いたり緩めたりしながらゆっくりとすすみ、突然訪れるクライマックスでは、読む者をマティルダと一体化させ、言葉にできない暴力を内側から体験させます。

小説の至る所にポストコロニアルなメッセージが散りばめられており、ブーゲンヴィル人(黒)、パプアニューギニア人(赤)、オーストラリア人(白)、空と海(青)、そして犬(黒)などそれぞれの色が象徴するものの対立とせめぎ合い、そしてキリスト教を強く信じる母(黒)と無神論者の教師ミスター・ワッツ(白)との間で揺れる、マティルダがまっすぐな言葉で語られています。

小説のオリジナルタイトル*Mr. Pip*は、19世紀後半の英国作家チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』の主人公の名ですが、現代の一般読者にとってはあまりなじみがあるとは言えないでしょう。ディケンズの小説が次々とBBCの歴史ドラマ化される英国の外では英語圏にあっても、文学専攻の大学生でもなければ、このタイトルにピンと来る人は少ないようです。ジョーンズはそのことをわきまえていて、この作品はディケンズの物語を全く知らない読者にも、それがハンデにはならない仕組みになっています。もちろん、この小説を読んだ後では読みたくなること請け合いです。また、1998年のハリウッド映画*Great Expectation*では、イーサン・ホーク演じるピップ、グエニス・パートロー演じるエステラ、そしてロバート・デニーロによるマグウィッチで、英語圏内外でディケンズ作品の魅力を復活したようです。

ディケンズの小説に詳しい読者にとってオーストラリアという国はおなじみの国で、それは都合よくキャラクターを排除する手段として使われ、悪者を流刑にする場所か、行き詰まった人物が出かけて行ってやり直し

をする場所、のどちらかとして描かれています。すなわち、地獄と理想郷を兼ねた物語上の空間なのです。そしてそれは、現代人のイマジネーションにも存在するもので、オセアニア地区全体が英国にとって、マイナーで付属的な「辺境の文化圏」であり、みすぼらしいオーストラリア人トム・ワッツがディケンズのオリジナルを勝手に変奏しながら、子どもたちのための物語を紡いでいき、それがひとりの黒人少女を支え続けるというアイロニーが、実はロイド・ジョーンズの仕掛けたニクい裏わざでもあるのです。さらに、ミスター・ワッツが実はニュージーランド人だったというオチを作ることで、常にオーストラリアの影にされてしまうその国の声を引き出そうとしています。

また、マティルダの村が政府のレッドスキン兵士によって荒らされ、家が焼かれ、さらに村人が殺されていく時、村人はただでさえ少ない所持品を失ない、自分の身一つになって裸足で立つ。それでもまだ空気があって、パイアとバナナがあって、海には魚がいて、それで生きていける、というくだりは、消費文化に浸って暮らす私たち日本の読者に、はっと息を呑ませます。

この本のブックレビューの中に、ひとつだけ、クライマックス後の書き方、特にマティルダが島を脱出して舞台がオーストラリアに移る時点で興味が薄れたという批判を読みました。この評者はトラウマからの回復・蘇生の物語の部分に同調できなかったようです。この反応を読むにつけ、私は逆に、男性作家ロイド・ジョーンズがいかに繊細にマティルダを回復させていくかという点に驚かされるのです。

この作品はイギリス連邦作家賞の最優秀賞を授与し、権威あるザ・マン・ブッカー・プライズ（2007年）では惜しくも次席となりました。作品の言葉使いや表現は十代の読者にも読みやすいため、オーストラリア

とニュージーランドでは高校や大学の国語と文学の準テキストとして広く使われることになるでしょう。ジョーンズは第一作*Biography*（2000）でニュージーランド最高の文学賞を獲得し、その実力は作家間では周知の事実であったにもかかわらず、この小説が世に出るまで世界的には無名に近い存在でした。今回は英国での評価が先立ち、オーストラリアとニュージーランドにブーメラン的に戻ってきた次第で、これからの国際的な活躍が期待されます。日本の読者にとっても注目していきたい作家のひとりです。

*『大いなる遺産』の概要：

孤児のピップを主人公とする物語で、ディケンズの他の多くの作品と同様、自伝的要素の多い作品と考えられている。『オール・ザ・イヤー・ラウンド』という週刊誌に二章ずつ発表され、それぞれが「乞う、ご期待」といった終り方で読者の興味を繋ぎ、なおかつ、ひとつひとつの物語にある種の完結がもたらされる書き方がされた。主な登場人物はピップ、その姉の夫で鍛冶屋のジョー、結婚式の日には花婿に裏切られ、それ以来時計を止めた暗い屋敷に住むミス・ハヴィシャム、その養女の美しい娘エステラ、ピップに助けられ後に遺産を残すマグウィッチ、その遺産を取り仕切る弁護士ジャガーズなどである。日本語訳は文庫本になっている他、映画化やテレビドラマ化が繰り返し行われており、前述のハリウッド版を含め、複数のDVDが入手できる。